


図書館通信 -26-

1974. 4



ライブラリー・オリエンテーション Library Orientation



- 期 間 4月15日(月)～20日(土)
- 時 間 第1回 11:00～
第2回 13:30～
第3回 15:20～
(但し 上曜日は第1回目のみ)
- 所要時間 毎回40～60分
- 内 容 図書館案内(書庫内見学も含む)
利用案内 他



案内 図書館が諸外国と比べて日本では、あまり利用されていないことの原因が論じられる時、よく言われることがあります。それは、日本ほど本屋の多い国はない、そのため図書館へ行くより、まず書店に駆け込んでしまうということです。

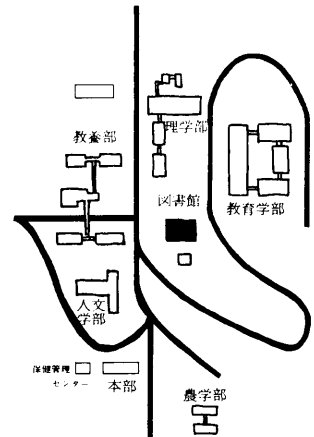
図書館と本屋とは、本の利用者を奪い合うという点で同列なのでしょう。確かに“本を提供する”という共通の基盤に立つ両者ですが、本屋は提供してしまえばその役割は終わってしまうと思います。しかし、図書館の場合、過去何十年かにわたって蓄積保存した資料を利用者の必要に応じて適宜提供し、と同時に、別の役割をも果しているのではないかと思います。その役割は、図書館の利用のしかたやどんなサービスを受けられるかを知らせ、教育機関を出た後も、図書館を身近なものとして活用してもらうということではないかと思います。

ここ静岡大学にあっては、図書館は、全学の利用者の便を考えてキャンパスのほぼ中央に位置しています。総面積約4000㎡の内に約290,000冊の図書と2,400種の雑誌・紀要類が所属されて、約600席の閲覧席が設けられています。他の大学図書館一般がそうであるようにこの四角な建物が果たすべき機能として、図書館資料を管理し、職員ならびに学生の調査研究に資することと謳われています。これは、つまり、大学の教育・研究活動を側面からアシストし、同時に総合的教養の場として様々な有用な資料・情報を提供するということでしょう。

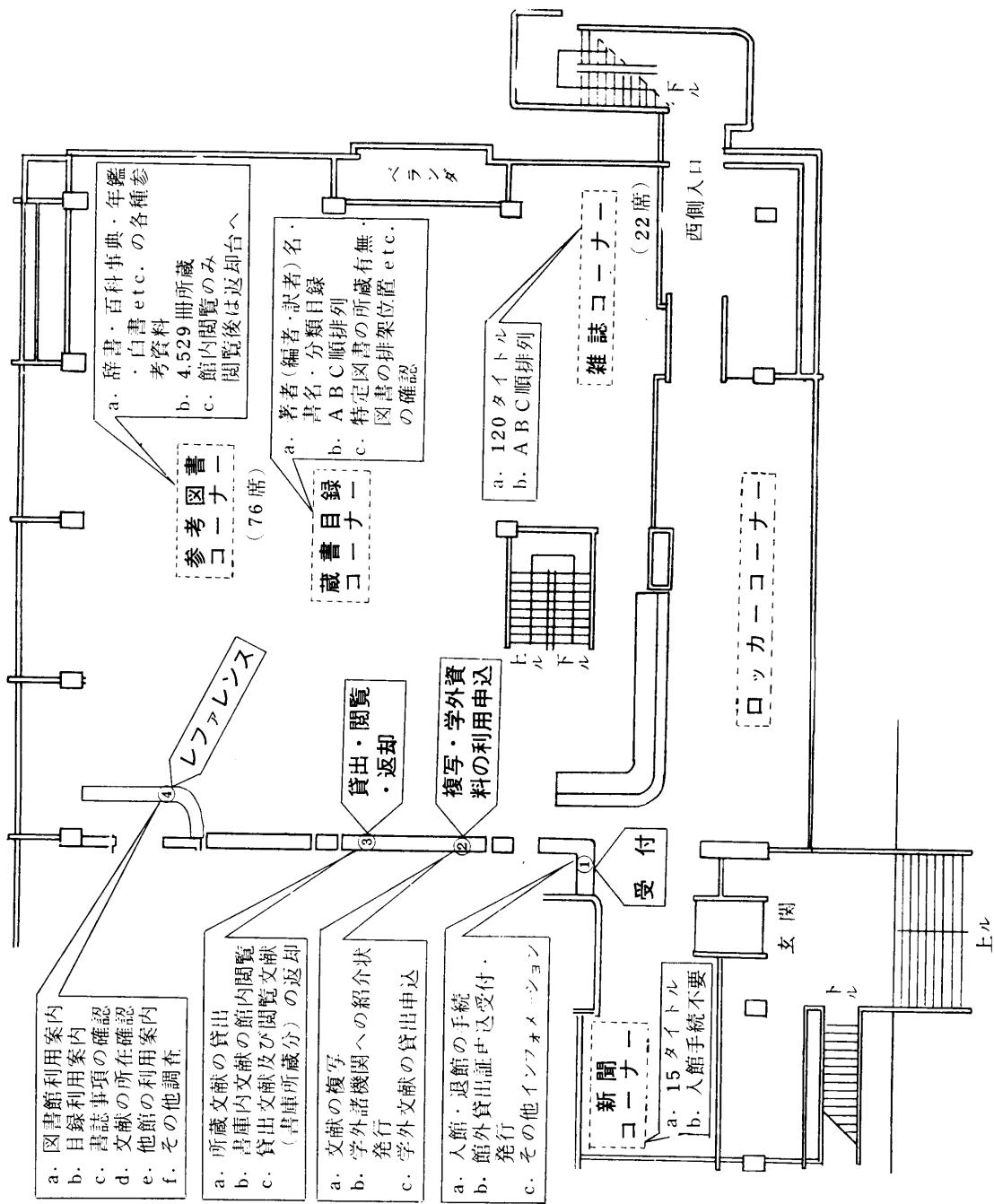
そこで新入生諸君に四年間の図書館とのコンタクトの第一歩としてLibrdry Orientationを企画しました。できる限り参加されることを希望します。

も く じ

- Library Orientation 1
- 私のすすめたい本・24
教養として私のすすめたい本
石塚経雄..... 5
- 語学のすすめ
大学の英語教育
安永義夫..... 6
大学における外国語学習に
ついての一考
若杉英治..... 6
フランス語の学習について
常岡 晃..... 7
中国語と私たち
釜屋 修..... 7
- 4階閲覧室・3月15日昼下り
松崎 勝..... 8

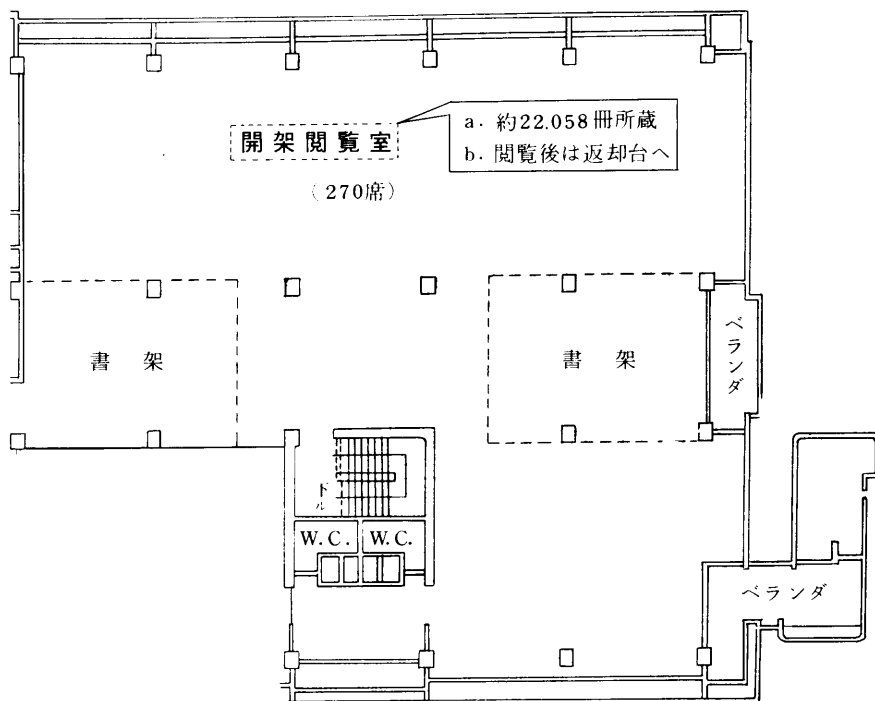


読 煙

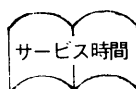
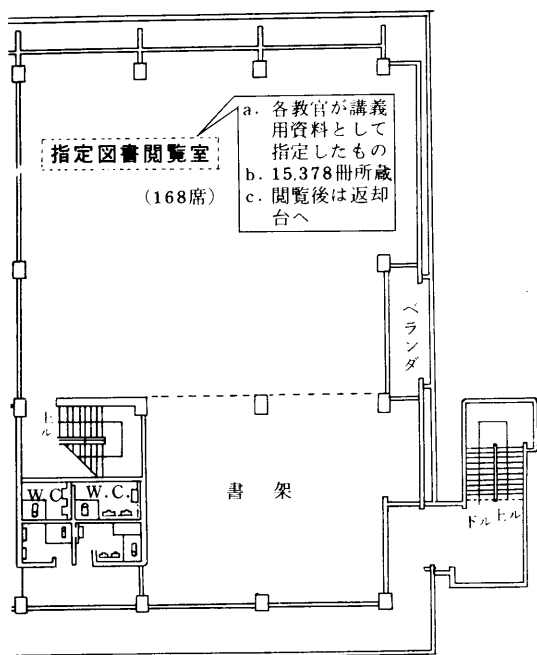


3 階

4 階

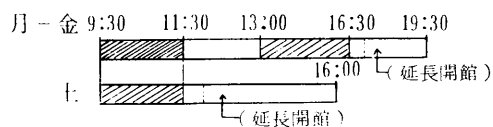


2 階

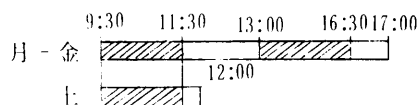


開館時間・窓口受付時間

a. 試験期（9月、12月）



b. 試験期以外



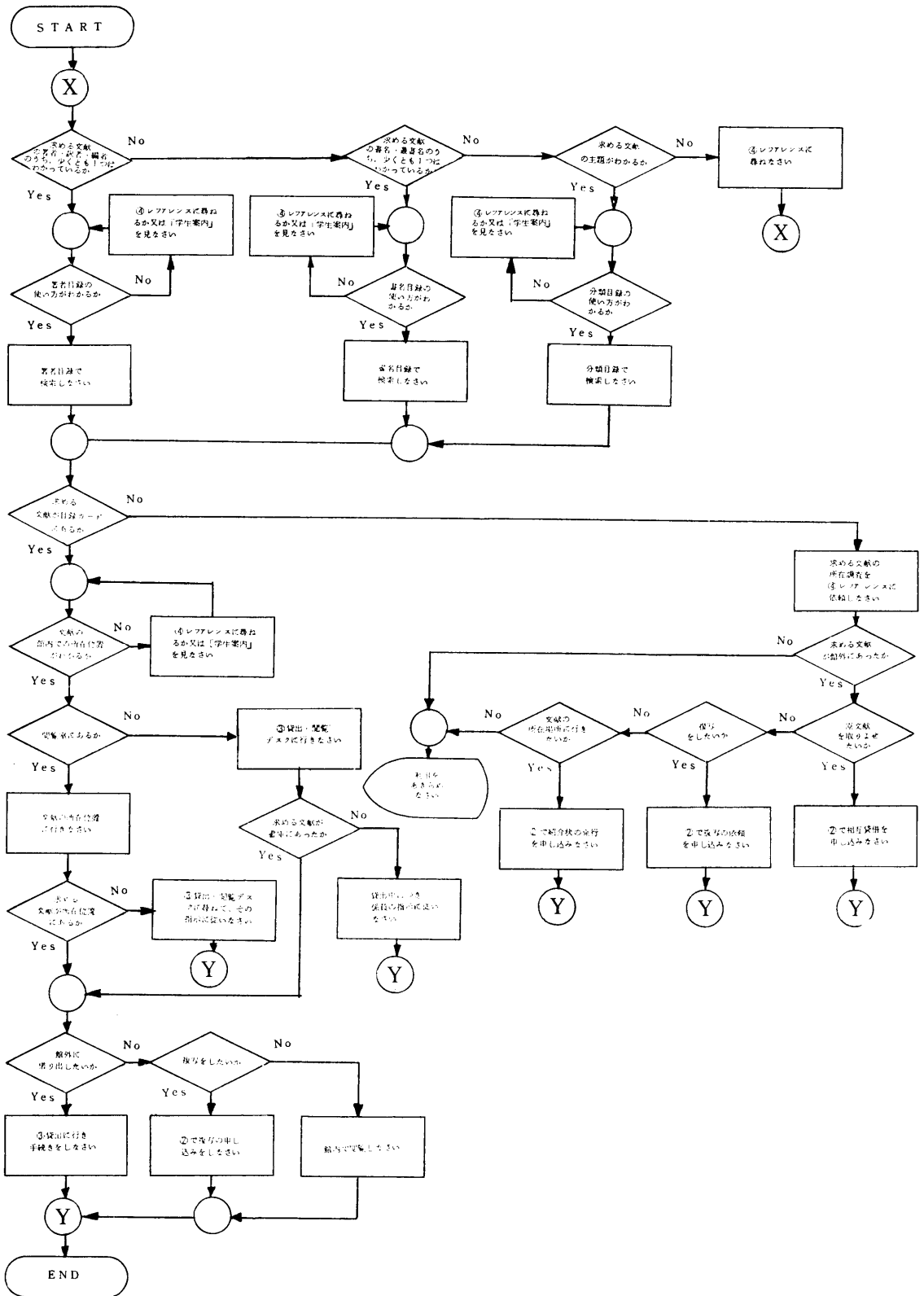
- (注) ①番受付、②番複写・学外資料利用申込、③番貸出・閲覧・返却、④番レファレンスの業務を行っている時間帯。
- ①番受付、③番返却の業務のみ行っている時間帯。

c. 休館日

日曜日・祭日・本学創立記念日（6月1日）
 その他図書館業務上必要な時（「図書館通信」・掲示等でお知らせします）

検索法

文献へのアプローチの一例（雑誌や新聞の収録記事・論文は除く）



教養として

私のすすめたい本

行塚 経雄

ラ・ロシュフコーは、書物よりも人間を研究する方が必要だ、という。古今東西に亘って万巻の書を読破している実存の哲学者ベルジャーエフは、読書は彼の思想の源泉ではなかったと語る。しかし、こうした発言の背後には、読書によって経験的につちかわれてきた自己があったはずである。読書の重要性は、いまさら強調する必要はなからう。もとより書物は、あくまで人間が読むものであって、書物に読まれてはなるまい。しかし書物に読まれたい自己を形成するためには、逆に多くの書物を読み、それによって自ら考える外はあるまい。ただ、謙虚さを失った読書は、かえって自己自身の隷従性に奉仕するだけである。プラトンの洞窟のたとえに示唆された近代初頭のF・ベーコンは、人間のおちいりやすい洞窟の偶像を戒めているが、洞窟の中から宇宙を観察する、つまり、針の穴から天をのぞく式の読書法は、しょせん自己の狭隘さに拘束されたままの自己を露呈することとなる。したがって読書は、自己の内面で開かれ、解放されている自覚的主観と、著者との精神的交わりによる自己生成的行為であるのではなくてはならない。デュアメルは、結末を理解してから始めを理解すること、それが新しい読書法であり、新しい生活法である、と語っているが、それも読書の一技術ではあろう。

解釈学的方法を、その哲学の方法として提示するディルタイは、解釈するということは著者を、著者自身が了解していたより以上に了解することである、と語ることによって、その解釈学の基礎を示した。彼の意味する了解とは、外から感情的に与えられた記号から内的なものを認識する過程であり、解釈とは、文章に固定された生の表現を技術的に了解することであった。この根拠には、生の事実が言葉によって表現することができるということ、つまり、生がロゴス（言葉）的構造をもつということが前提されている。ともかく彼の解釈学は、歴史学や言語学と深い関係をもつものであった。

いささか前置きが長すぎるが、なお付加する必要があった。それは、モンテーニュがその随想録のなかで、「各人は自分の前をみる。私は自分の

内面をみる。私はただ私だけが相手なのだ。私は絶えず私を考察し、私を検査し、私を吟味する。他の人々は常によそへゆく。」とのべていることである。ソクラテスがその人生観とした自己認識は、現代においても強く要請されなければならない。そこから発した自己の孤独性の認識は、共同体への前提となろう。わたしたちは、日常性のうちに深い虚偽のあることを感じつつ、それを直ちに追及して虚偽の根となっている深淵をのぞきこみ、そこに真実の光りを投げこむことに、何かしら不安を感じがちである。キルケゴールではないが、他人と同じであることに安堵感をいだくのは、帰るところ生活の安易化のためであり、いわば生存の不安から逃避しようとする生存の一つの要求でもあろう。それは、ハイデッガーのダス・マン（ひと）の在り方であった。

現代は、まさしく不安の時代であったが、不安は常に危機と結ばれている。不安は、時代の転換点の特徴であった。根源的にみれば不安は、人間存在の有限性から結果し、死の恐怖が生不安となるといえよう。こうしたなかで、真に自己を認識し、また人間存在の深層を知るために、ドストエーフスキイの著作、とりわけ『カラマゾフの兄弟』をすすめたい。抽象的人間一般ではなく、具体的人間のさまざまなあり方をはじめ、「大審問官」のなかで示される自由の諸相は、多くの示唆を与えるにちがいない。また、自己形成に役立つはずである。

最後に、「心静かな図書室（館）や実験室を自分の住家としなさい。自己教育のために自分は何をしたか、とまず自分に問うことです。次に自分は何をなすとげつつあるか、と問うのです。そうすれば、いつかは人類の進歩と福祉とに自分の寄与をなしたと考えて、限りない幸福を感じずる時がくるでしょう。」と語ったパストゥールの言葉は、銘記すべき含蓄に富んだものといえよう。

（教養部教授 哲学）

（P 7 右下より）

せい20年である。教科書もまた決定版がない。僅かに倉石武四郎氏の労作「岩波中国語辞典」が中国語への科学的アプローチに貢献しつつある。愛知大学「中日大辞典」は語彙数においては尨大である。日中国交回復に便乗したお手軽教科書や不正確、不適當な録音テープの氾濫にはくれぐれも注意したいものである。（教養部助教授 文学）

◆ 語学のすすめ

大学の英語教育

安永義夫

中学、高校と六年間英語を勉強してきて、更に大学で二年間それを続ける意義について問われることがよくあるが、六年間勉強しても、実情はそれぞれの専攻する分野の原書がまだ十分読みこなせないし、今までつめこんだ知識はこま切れであって、それらを総合し運用力をつけて、一冊の本を読み通し、自分の意見を英語で書いたり口頭で発表することが出来るようにならないと、こま切れの知識は生きてこない。つまり読み、書き、聞き、話す四つの技能を更に総合的に発展させるわけであるが、高校よりもその内容は高度になってくるし、教養課程の英語教官の数は少く、学生の数は多く、L.Lなどの設備は整っていないなど、さまざまな困難点がある。それに町の会話学校とちがって、大学では外国の偉大な作家や思想家たちの作品を、翻訳でなくその国の言葉で読むことにより、その思想感情を肌で接するようにして吸収することに意味があるという、教養的な面の方にどうしても重点が置かれる。然し、実用的な面も、志さえあれば勉強できるように、当大学に於ても外人による会話の時間が相当数設けられているので、せいぜい利用してもらいたい。読みを深めるといことが普通の授業の中心になるわけであるが、その内容は教官によりさまざまで、日本語を使わないで英語で授業を進める場合もあり、録音テープを使ってhearingの練習をする場合もあり、速読の力をつけることに重点をおく場合もあり、論文の主旨をつかみとって discuss することもあり、授業の一部を英作文の練習にあてることもあり、小説あり、詩あり、エッセイあり、シェイクスピアあり、児童文学あり、神話あり、言語学ありで、諸君はその中の何れかを学ぶわけであるが、二年生になると、週一回は、一斉に開講された英語の授業の中から自由に選択できるようになっている。このような選択制については、将来ロシア語や中国語の講座も設けられるようになれば、英独仏を加えて五つの外国語の中から自由に選択できるようにするというようなことも考えられている。更には教官数の充実などの条件が整えば、少人数ゼミナールを開いたり、中部地方や関東地方など各地方に一つずつでも語学研修センターを作って、そこには実用的な面の教育にすぐれ

た能力を持つ日本人教師や外人教師を配置し、視聴覚の設備を十分整えて、夏休みなどにそこで研修してくれば、外国語の単位として認めるようにするとか、夢を追えば際限がない。

最後に現実に帰って、さしあたり必要な辞書について一言。やはり鞆に入れて持ち歩くポケット型の辞書と共に、下宿の机の上に置いておく中型の辞書が(生協の売店にあるようなもので結構)必要であるし、和英辞書も一冊は用意しておきたい。更にそれぞれの専門分野の用語を集めた特殊な辞書も大分出ているので、それがあれば便利だし、英文科に進む人は、P.O.DやC.O.D.などのような外国の辞書や、もっと大型の辞書を引くことも必要になってくるであろう。

(教養部教授 英語)

大学における外国語学習についての一考

若杉英治

ドン・キ・ホーテの勇気をもって「教養科目」という日本語に相応する言葉をドイツ語の語彙の中から選ぶとすれば、現代では耳慣れない言葉となってしまった *Humaniora* という言葉を使って見たい気がする。勿論これは本来のドイツ語ではなく、ルネッサンス時代のラテン語からの借用語である。すなわち *litterae humaniores* (より人間的な学芸) とか *litterae liberiores* (より自由な学芸) と同意義である。ここで重要なのは、「より人間的な」、「より自由な」という言葉の歴史的重みである。それは周知のように、従来のスコラの学問に対して、古代ギリシャ・ローマの文芸を指していた。そしてそのことは同時に現実に対する批判としての学を意味していた。現代の我々にとって、「より人間的な」「より自由な」とはどういうことなのかを考えることは、極めて困難な状況にあるというのは確かであるにしても、こうした姿勢を固持し、我々の学問の理想をそこに求めることは、必ずしもアナクロニズムではないだろう。現実の批判ということを行ったが、自分も既に批判されるべき現実であるという点において我々にとって最大の知的弱点の一つは、自分を主張する己れの姿を同時には見ることがなかなか難しいということであろう。言葉というものは、言うまでもないことだが、思考の結実したものであると同時に思考を決定する。外国語と接することによって我々は絶えず日本語的思考と外国語的思考との間を翻弄させられる。このことによって、自分の中に一義的ではない、両義的、多義的な自

己を作り出して行くことが可能なのではないかと思う。そして少なくともこうした自己省察としての知的訓練が、唯一語学のみ、そして、語学に課せられた唯一のとは決して言われないにしても、外国語学習の重要な要素のひとつであるのではないだろうか。

II

英語を既に学んでいる人がドイツ語に接して戸惑うのは、ドイツ語文法の煩雑さではないかと思う。同じ印欧語の中でも最も変質したと言われる英語と、比較的印欧語本来の文法形態を保っているドイツ語との間には、可也の相異があるが、学習者の便宜のために、強いて参考書を挙げるとすれば、「関口：新ドイツ語大講座（全三巻）」（三修社刊）の上巻が、英語と比較しながらドイツ語文法の特徴を要領よく纏めてあり、適当ではないかと思われる。その他入門的な参考書としては、ページ数の少ない、通読できる程度のものが良い。最後に辞書になったが、現在普通に使用されている辞書で十数種類もあり、それぞれ特徴があるので、その紹介は各先生方にお任せすることにした。

（教養部講師 ドイツ語）

フランス語の学習について

常岡 晃

ヨーロッパのほぼ中央に位置している現在のフランスは、もとゴール地方と呼ばれ、ケルト語が話されていた。ところがB.C.58年頃ローマのシーザーがこの地を征服して以来、征服民族の言語であるラテン語が土着のケルト語にとって代った。以来このラテン語は、長い年月の間に漸次フランスの風土に馴化され、いわゆるローマン語という一種の方言の過程を経て、今日のフランス語を形成するに至った。つまりフランス語の歴史は一口に云って、ラテン語という殆ど単一の母系言語のフランス的純化作用の歴史と言ってもいい。

ここから「世界で最も明晰で論理的な言語」というフランス語の最大の特徴が生じてくる。言いかえれば、フランス語とは例外の極めて少ない規則で武装された、数学的で理詰めの言語なのである。従ってフランス語の入門者は、その最初の半年間乃至は一年間に、極度の集中力を発揮して、短期決戦、基本的な諸規則を徹底的にマスターしてしまうことが肝要である。このいささか苦しい最初の急坂をもし突破出来れば、後の道程は他の外国語よりも比較的平坦であろう。

中学・高校で既に英語を習得した者にとって最も好末の悪いのが発音である。一日も早く英語の訛りをとってフランス語の発音の法則を会得すること。次いで動詞の変化。フランス語は典型的な屈折語である為に、動詞の変化の多様さは英語の比ではない。倦まずたゆまず朝な夕な変化表を誦して丸暗記すること。使用する初級フランス語のテキストは、必要最小限の事項は網羅してあるので、教室の授業内容を完全に理解すれば、少なくとも最初の一年間は別に参考書は不要である。ただ次の辞書と動詞変化表は是非購入されたい。

スタンダード仏和辞典（大修館）、又は新仏和中辞典（白水社）。標準フランス語動詞変化表（白水社）。尚、余裕のある人はスタンダード仏和辞典（大修館）（教養部教授 フランス語）

中国語と私たち

釜屋 修

Zhōngguóhuà（中国語）の美しさの特質は、その澄んだ音と各音節固有のtoneが織りなす独特のmelodyにある。一方、中国語表記の手段としての漢字は日中両国の文化交流を反映して私たちになじみ深い。中国語の世界は外形上この二つの要素で構築されるが、私たちはややもすれば漢字の持つ表意性に目を奪われがちである。詩人Ezra Poundはフェノロサの遺稿整理の中で東洋に魅かれていくが、例えば巖風をthree dogs windと翻訳する。犬が三匹風に吹かれて転がる、と篠田一士風に解すればPoundのImagismに合致しようか。しかし、巖飄それぞれはbiāo、piāoであってみればそれはもはやビューウと唸る風の音そのものであり、その風の猛々しさは犬が尾を巻いてほえたてるさまに似通うということであろう。Poundを笑うことはできない。おマルで育ちジャンケンポンと遊び、湯呑みに飯を盛り、ベッドを飾りのspaceとして建築様式に定着させたのはわれわれの祖先であるが、われわれは今そこに中国語を意識しない。これらは、お馬兎（mǎr）両拳碰（二つの拳が出会う、liǎngquānpèng）、茶碗（chāwǎn、中国人が飯を盛るのは飯碗 fàn wǎnであり、床 chuáng はベッドである。

本学の中国語教育は一般教育課程としては第二年度である。欧米の言語に比しアジアの言語は不当にも勉強の機会が少ない。そのことは直ちに教学方法や教材の質量に関係する。中国語学研究もまたせいぜい50年、新しい中国が pǔtōnghuà（民族共通語）として同語規範化を行なってからまだせい

（※ p 5 右下へ）

4 階 閱 覧 室

● 3 月 5 日 昼 下 がり

松 崎 勝

3月に入った図書館は閑散としている。昼下がりの4階閲覧室には、何を求めてか、10幾人かの学生がポツンポツンと窓際に坐っているだけだ。ほんの10日程前迄は試験準備の学生たちでザワついていたのだろうこの空間は、差し当り「兵どもが夢の跡」とでも形容されようか。

こんなことを書き始めたからといって、今日の私は夢の跡など眺めにここへ足を運んだのではない。半月程前に読み掛け、そのまま雑事に忙殺されて放置してあった「蒼ざめた馬を見よ」（五木寛之）に誘われてやってきたのだ。今し方、急がされる様に読み切り、サッと翔けるかの如く流れた作品の残影にひとりポツンと取り残されたかの様な妙な気分に見られている。うまい表現を知らないが、しばし込み上げてくる熱いものの拡がりを味わうといった「内灘夫人」読後の様な感慨を覚えることは期待できそうにない。

窓外は、雨にでもなるのか薄い灰色の膜に被われてゆく。私の背後からはグワーン、カシャカシャとエレベーターの機械音が伝わってくる。書架の北側の壁を通して、聞き馴れた整理係の人たちの話声や靴音も耳に届く。…ジエーヴシカ…オリガ…ジエーヴシカ…オリガ…ただ無暗矢鱈と繰り返してみる。

「兵」ではない私などは、ここに坐って長時間活字を追い続けることなどできない。こうしている間（「さらばモスクワ愚連隊」をペラペラ繰り返し始めている）にも様々な想いがパツト浮上し、またパツと霧散したりする。私がここに坐っている時は常にこんな調子だ。今日の五木作にしても数日前のフラーリ行の途中で引掛かったものだ。私は、元々当館の常連ではなく、こうして現れる時はというと、作品に対する浮気心を解き放ちにきたということになる。（尤も、今年度は、8ヶ月程のアルバイトとして裏口から入って裏口から帰るといふ意外な常連の名を残すことになったのだが）。ただ、雑兵たる私とて学徒としての「兵」気分を追われて、当館の扉を押ししたこともある。しかしそんな時でも大概は数少ない開架本の背表紙を流

し見ながらフラーリフラーリを決め込んでいた。そして、決してどこかに引掛っていた。ことに試験期などで、何の興味もない課題を押し付けられて入館し、もう何人もが抜き書きしていった参考本をめくる時の不愉快にあたりし時は尚更だ。引掛かり、引掛かり、試験期が終わってみたら幾冊かの小説本を読破していたということがよくあった。

これをトツトツと書き散らし始めてから2時間あまりが過ぎた。学生も2、3人は入れ代っただろうか。

ふと、足下の書庫に沈められてある、まだ見たこともない本の山のことを思う。そして窓際で前かがみになって本を読む学生の後姿が目に入る。そして、こんなことを考える。

およそ静大生の精神の営みは、当館の書庫に象徴される様な研究成果の積重ねや、試験結果の著積にのみにあられるものではなからう。「兵」にしる「雑兵」にしる、ひとりひとりの「大学」「教育」に纏わる偏向した想いにこそあられると思う。しかし、外在化されることの稀な個的教育体験は、各自の胸奥や私製本の中に秘蔵されたまま目の目をみることなくありえざりし想いとして断ち消えていってしまうようである。そう思うと、私は、足下の本の山と突如として拮抗しているような興奮に身ぶるいしたくなる。今、私は、雑兵にしか見ることのできなかつた大学・教育に対する想いを、秘蔵という書庫に沈めてしまうのではなく、何としてもどこかで披瀝し続けねばならないと思っている。

次々と想起しては消える思念と並行して、どうか「さらばモスクワ愚連隊」も読み終った。すると、フツと息をつく間もなく、入口のところに運用係のジエーヴシカおふたりの姿がみえた。途端に退館をせかされる気ざわしさに、あれこれの想いがゴチャゴチャにかき乱される。それでも、オリガ、ミーシャ、エルザだけは、この気ぜわしい時間の流れから、かろうじて私を救っている。

さて、いずれこの拙文は「通信」に活字化されるようである。が、その頃私は東京のいづこかの地で、今日のようにあれこれの想いにかられながら（風に吹かれて）いられるだろうか、いずれにしる、この文だけは、ここ静岡の地に棄ててゆくことになりそうだ。

（教育学部 昭和48年度卒業生）